

Title	田中萃一郎史學論文集(三田史學會編)
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1933
Jtitle	史学 Vol.11, No.4 (1933. 2) ,p.173(679)- 176(682)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19330200-0173

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

田中萃一郎史學論文集 (三田史學會編)

先生逝かれて早くも十年の歳月は経過せんとしつゝある。我等は今茲にその十周年に際して、追慕の念止み難いものがある。先生が研學一日も怠ることなく、學に精進せられたる勇ましい奮闘振りには、一代の快事として、今なほ我等の眼前に髣髴たるものがある。我等はそれを記念すべく、こゝに先生の著作目録を編修して、先生の活動が如何に多方面に互つてゐたかを世に示すと共に、その中より、最もよく先生の本領を窺ふに足るべき、若干の論文を抜萃刊行して、本邦史學史上に於ける先生の位置と業績とを知るの一助たらしめたいとの念願から、本書は編纂せられたものである。

先生の史學は、林塾長の簡單なれども明快なる序文の中に示せる如く、『東洋史を得意とすると同時に、西洋史にも精通し、且政治に哲學に、造詣甚だ深く、其の該博なる知識は實に驚嘆に値するもの』があつたのである。その著作目録を一瞥せられたものは、何人もこれを否定し得ないであらうと思ふ。たゞ私共は細心の注意を拂つたのであるけれども、なほ脱漏も多々あるべき本目録の

中に、不幸にして餘りにもよく我等に知られたる『大英國國業論(譯)アルフレット・ヘットナー原著、大正六年九月』を脱落したことを、故先生及び大方の諸賢にお詫しなければならぬ。

先生の略歴及び本書編纂の經過は、その遺稿整理の事業と合せ、川合博士の序文と占部博士の跋文とによつて明瞭にせられてゐる。本書の内容及びその他に關しては、目下學術諸雜誌に批評並に紹介を賜はりつゝあるので、我等は深く感謝しつゝある次第であるが、こゝに編纂者の側からしても、數言を費やすことが許さるべきであらうと思ふ。

先生は史學の發達に對して特に興味を持たれたのである。既に一九一〇年、慶應義塾大學部の文學科の中に、史學科が創設せられた年に、西洋上古史として埃及學及びアッシリヤ學の沿革を講ぜられ、傍ら科外講義として學校の晝休の時間を利用して、一般學生に向つて特にランブレットの「What is History?」を講じ、次年度以下に於て「Sir Henry Maine, Ancient Law; Fustel de Coulanges, La Cité antique; Hegel, Philosophie der Geschichte」等を順次に解説せられて、我が新史學の建設と普及とに資せられたものである。

本書に收めたる「Emil Reich 氏の史學研究法」は、先生の歐洲留學後最初の論文として、三田學會雜誌創刊號以下に續載せられ、世間の注意を惹いたものである。而してオリエンタリズムを講ぜられた先生が、「ホメロスの史的復活」を説かれたことは、フランスの「古代市邦論」(註一)を講ぜられ、又その「古代フランス法制史」を祖述せられつゝあつた(註二)先生が、その研究法

を論じたるフュステルの高弟ジュリアンの筆になる「古代國家論の五十年紀」を反譯紹介せられたことと共に、また當然の経路なのであつた。「希臘の二大史家」は、我等の「史學」創刊號の卷頭を飾るべく、特に執筆せられたもので、最も特色ある雄勁なる文章である。「史學の性質及び任務」は、東京市の主催による公衆に向つての通俗講演の筆記であつて、本書の他の論文とは聊か趣を異にするのであるけれども、史學の一般について平易に説かれてゐるので、特に採録することゝなつたのである。

「民主政治論」「社會學者の政治研究」「自然法に關する學說の變遷を論ず」などは先生得意の壇場で綿密なる記述を見たのであるが、「クロバトキンの史觀」「ラフスキイ氏の國家論」「國家の生物學的觀察」などの紹介批評の論文と共に、學史的發達を説ける好資料であつて、又先生が本邦の一般史學者と異なる點をも窺はしむべきものである。是等の諸論文を読んで初めて、先生の先生たる面目は明かにせられるのであらう。

最後に掲げた「獨逸中央黨の労働者保護運動」(註三)は、先生の最近政治史方面の造詣を示すべき著作甚が多きがために、却つて本書に收容し切れなかつた論文の一本本として採録せられたものであつて、本論文發表の當時に於ける劃期的の論文であつて、今日盛んなる社會問題を取扱へる此種論文の魁をなせるものであらう。先生の列國政治史の聽講者の中から、高橋誠一郎、小泉信三兩氏の如き、斯學の大家を出したことも之によつて首肯せられるのであらう。

而して本書に収録せられたる諸篇に於ける固有名詞術語等に於

て、前後不一致であることは、その論文發表の時日の相違せることに基づくものであつて、學史的研究者を除いては、一般讀者の不便とする所であらうが、校正者の規準たるべき日本語の公定せられてゐない今日亦已を得ないのであつた。但し同一論文内に於ては努めて統一を期し、若干の補正も試みられてゐるのである。

(註一) 故鈴木鏡之助氏譯、泰西名著歴史叢書中第一編「希臘羅馬史論」は、本書の譯である。

(註二) 先生は本書を翻譯して講義せられたことがあるのでその一部分が残つてゐる。

(註三) 本篇は高橋誠一郎先生の御注意に基いて特に収録することゝしたものである。(間崎万里)

東洋史方面に於てその「元の官吏登庸法に就いて」は、博士の元史に對する蘊蓄を傾けしもの、世祖の官吏登庸法の公平にして、廣く人種の異同を問はず、人材を選び用ひたることを論じ、後に元の支那本部を失ひたる主要原因は、決して官吏登庸法の缺陷に非ざることを説いて居る。文中マルコ・ポロを、樞密副史とするの通説の謬妄を指摘せる如き、當時に於ては前人未發の卓見であつた。「太平天國の革命的意義」は、博士が滯英中探訪せる大英博物館や印度省所藏の太平天國關係史料を用ひ、太平天國の諸制度を闡明し、その革命的意義を論じたるもの、諸制度の中最も革命的であつたのは、其教理と曆との二つであり、しかし此二つも、純粹な西洋のものを其儘採用せるものでなく、著しく之を改竄したるものであり、支那人の自尊心、保守的精神を現はしてをると論じ、此講演の行はれたる當時の時局に之を適用して、辛亥革命

が、西洋流の革命に非ず、支那人の尊大心保守的精神が眞の意味の大改革を遂行せしむるに大なる障礙をなせることを論じて居る今日國民政府の現状を見るにつけ、今更博士の先見の明に服さざるを得ない。因みに其後大英博物館の太平天國史料は、内藤虎次郎氏、鳥山喜一氏等により採集せられ、田中博士の手寫せられし草稿は、内藤博士の採集せる文書整理出版の参考資料として同博士の許に委託せられてをる。「墨銀考」「同補遺」は、何れも支那に流入せる墨是哥弗に就て考證せるもの、古錢愛好家としての博士の片鱗を窺ふに足るものであり、墨是哥弗が、香港圓銀に影響を與へ、ひいて日本圓銀とも關係淺からず、日本の新貨が、圖型を採用せるは、けつして大隈參議の建議によつて定まりしに非ずして、墨銀香港圓銀の模倣に過ぎざることを明かにしてゐる。「十三行」は、廣東に存在せる十三商館に就ての研究であり、廣東貿易の歴史に光明を投じ、「汪龍莊遺書を讀む」は、「史姓韻編」の著者汪龍莊の人物と著書とを綿密に紹介し、その著書を通じて當時の經濟事情の一端を示してをる。圓熟せる博士晩年の傑作であり、よく清朝時代の幕賓の生活、中産階級の經濟狀態、物價、通貨の様を述べ、墨銀流通に關聯して「一圓」の稱呼の乾隆嘉慶の交に行はれたことを證明して居る。「支那學問研究法上の一特色——『雪橋詩話』を讀みて」は、楊鍾義の傳記を述べ、その『雪橋詩話』が羅振玉の云ふ如く全く清朝の外史でありしこと、その學術文藝に關する批判、財政經濟に關する記事を紹介し、最後に詩話と題して制度典章を説く支那學問研究上の特色に於て語り、支那の學者の方法がディレットタンチシニなりしこと、しかも此ディレット

ンチシニ必ずしも否難すべからず、之が中々學問の研究の上に立派な成績を擧げて居ること、ラポック、フレネザイなどの例をあげ、ことに史學に於ては綜合の必要あり、修史學が一つの文藝と目せられることを説いて、「敢て總ての學問とは云はぬが少くも史學の上に於ては科學的研究の結果を韻語にて表現せんとする支那學問研究法上の一特色に就て三度思を致す必要がある」と結んでをる。此論文は、博士の支那學に對する造詣の晩年益々深くかつ精緻となりしことを語る好研究であり、殊に其結論は、史學者にとり、頂門の一針となすべき訓言である。

「支那學の沿革」は、歐羅巴に於ける支那學研究の沿革を説き、十七世紀に於けるキリスト舊教宣教師達の貢獻より始めてド・ギトニユ、ラングレに及び、十九世紀初頭のアベル・レミニザ、クラプロイトの活躍に至つて筆を收めてをる。此種の記文は、ヨーロッパに於ても多からず、博士の起稿當時に於て殊に不自由なりし材料を驅使してこれだけの研究を纏めあげた博士の努力に對して讚嘆を禁じ得ない。最近石田幹之助氏が、其「歐洲人の支那研究」中「宣教師の支那研究と支那學の成立」の綱目に田中博士の此研究を底本とせられ、之を更に訂正増補せられたるは、故博士の靈も泉下に悦ばれてをることであらう。

「義莊の研究」は、支那では國家組織よりも家族制度の方が發達せることに注意し、家族制度盛衰の跡を辿り、范氏の義莊を中心として、此支那家族史上の注目すべき一現象、義田を設け、一族を救済するの制度に就て考證し、義莊や之に類似する制度が滔々たる個人主義の思潮を緩和する上に於て益あるや否や研究に價

すると結んで居る。博士の研究が一面に於て考證的勞作であると共に一面に於て痛切な現代批判なりしこと、此論文に於て殊によく現はれてをる。現代に於て西洋流な個人主義の弊害を救済し東洋流の家族主義の維持改革をはかるは、當面の大問題であり、早くも此點に著眼せる博士の炯眼に敬服せざるを得ない。「漢代の非官營論」は、桓寬の「鹽鐵論」に基いて、昭帝の時文學賢良の士の進言した官營を非とせる説を紹介批評したるもの、「日韓交通史上に於ける蔚山」は、博士の滿鮮旅行の産物であり、清正籠城地に就ての幣原谷井兩氏の説を反駁し、蔚山城一名島山城であり、一に籠城と云はれることを述べ、日鮮の文獻により清正籠城の経緯を論じてをる。

史學研究法方面に於て東洋史關係のものとして「史通」の著者を論ぜし「劉知幾の歴史研究法」は、注目に價する論文である。劉知幾は、唐代の史學者として卓越せし識見を有せし人、最近に於てもその重要性が益々認められつゝある。博士は、之を明治三十三年に既に研究の對象とし、縦横に彼の歴史研究法を論評してをるの、博士の著眼點の凡ならざることを示すものと云へやう。「王鳴盛の史學」も亦「十七史商榷」の著者たる王鳴盛の歴史觀を論じ、その現代史學に著しく接近せることを示せるもの、是等の篇は、前述の汪龍莊や楊鍾義の研究と相照應し、博士の支那史學史研究の由來久しきことを示すものである。博士の研究がプランメエシツヒなるを見るにつけ、最後の綜合を見ずして博士の近いたのはかへすがへすも痛恨の至りである。ちなみに本論文中是等の東洋史關係諸論文の校正を加藤繁博士が好意をもつて當

られたるは編輯者同人の深く感謝する所である。(松本信廣)

タキトウス・ゲルマーニア

(田中 秀央 共譯)
泉井久之助
刀江書院發行

數年間眞摯の努力を捧げて完成されたこの名譯はタキツスの記述を逐次的に邦譯されたのみならず、實に彼の有つ氣品をすらも傳へることを忘れなかつた。これ、ひとへに言語の考證と史實の理解とに對する譯者の苦心の努力が生み出した自然の結晶なのであらう。かくてその譯文は數多ある外語譯に比肩し得るものとなつてゐる。とりわけ第十節、第十七―二十節、第三十三―三十四節、第三十七節の如きは誠に立派なものである。譯者のタキツスに對する正しき理解はその簡潔な序文の中に一端をうかがふことが出来るし、その飽くまで學究的な態度は卷末に付されたテキストにこれを見ることが出来る。筆者が驚異の眼を以て幾度か讀み返してゐる間に氣のついた二、三の願望を此處に述べて見たいと思ふ。

凡そギリシャ史、ローマ史に於けると同様、古代の官職名の翻譯は斯うした試をなす誰もが必ずや遭遇するところの難關である。譯者もこの書の中に於てかなりな苦心をつまれたらしく、心あるものはこれを読んで恐らくその鋭い良心的努力に感謝の念を捧げることであらう。しかし筆者一箇の希望から言へば、斯う云ふ種類の翻譯には *Prætor* に於ける場合の如く成可く原語をそのまま挿入されて置かれた方がよかつたかと思ふ。事實、譯者は *Prætors* なる語の譯語に煩はされ第十節で「首領」と譯され